

# はぐれ鳥

よくある話だ。グループで旅をする  
と、必らずといってよいほど、「あれ？  
何君の姿が見えないぞー」などと大騒  
ぎになるものだ。はぐれ鳥が出たので  
ある。

これは僕にも覚えがある。古い話だ  
が、中学の修学旅行で京都へ行った時  
のことだ。お待ちかねの自由行動の時  
間がきて、それとばかりに、気の合っ  
た彼等呼び出した。七・八人はいた  
か。あちこち探険したり、見物した後  
に、気がついたら、僕一人となってい  
た。どうやら、舞妓のだらりの帯に見  
とれている間に、はぐれたらしい。当  
時は、京都も街灯は少く、歩いている



永岡 慶之助  
(作家)

人も少く、不安になる。道は覚えてい  
ないうえに、宿の名も覚えてないとき  
たものだ。

これでは、よい歳をした兄ちゃんが、  
みつともなくて、人に聞けるものでは  
ない。仕方がないと観念し、宿を捜す  
ことにしたが、東西南北、さっぱり判  
らない。秋の日は短く、あつというま  
に日が暮れて、宿の京洛の巷をさまよ  
うことになった。

幸い月夜だったので、足の赴くまま  
に、さまよい歩いていると、やがて大  
きな橋の上に出た。すると、さっと記  
憶がよみがえった。

「そうだ！宿は三条大橋の近くだっ

た！」

橋を渡って、しばらくすると、頭の上から、僕の名を呼ぶ声があった。仰いで見ると、見覚えある宿の二階に、懐しのニキビ顔が、ずらりと並んでいて、「おい、どこへ行つていたんだ!!」

「さんざん探したんだからな!!」  
で、僕は、

「月がとつてもきれいだつたから見  
とれていたんだよ！」

心細かったくせに、素直じゃなかつた。

僕と同じように、はぐれ鳥になった、少年白虎隊士もいた。

白虎隊は、戊辰戦争の悲劇といわれ

る、会津藩の少年隊だが、一中隊と二中隊の別があり、この日、慶応四年（一八六六）八月二十三日、戸ノ口原で、西軍大部隊と遭遇して、激戦の末、敗退したのは二中隊であった。

この二中隊に、偶然なことに、酒井峰治と坂井峰治の二人がいて、点呼の際に、まぎわらしいので、顔の色から、『青の酒井』と、『赤の坂井』と呼ぶことにした。

激走中に、先にはぐれてしまったのは、青の酒井少年だ。濃霧の山中で、仲間を見失い、絶望し、自刃をはかったところを、炭焼きの夫婦に助けられ、気力を回復した。農民に変装して、若松城下に潜入、無事入城することができた。

以来、一ヶ月にもおよぶ籠城戦にも、ケガもせずに生き残って、落城の日を向えた。俘虜収容所生活をへて、釈放された後は、新生の道を北海道に求め、旭川の地で明治の世を眺め暮したが、思い立って「戊辰戦争実歴談」五千字一巻を書き残した後、ひっそりと世を

去った。

もう一人の赤の坂井は、敗走し、敵を味方と見まちがえたため、一斉射撃を浴びて、堀へ転落。これがために逆に助かり、戦後は、箱館の郵船会社の支店長になっている。

はじめ四十二名いた隊士も、いつしか十九人までに減った白虎隊は、鶴ヶ城を望む飯盛山に達した時、彼等の目にしたものは、前月以来の戦鬪で、若松城下は、そこかしこから火の手が上がり、黒煙で城を見ることができないほどだった。絶望した少年達は、つぎつぎと、自刃して果てた。

ところが、ただ一人、飯沼貞吉（のちに貞雄と改名）は奇跡的に蘇生し、日清戦争には、通信技師として出征。明治・大正・昭和の三代を生き、昭和六年、宮城県仙台市において数奇なる一生を閉じている。

飯沼貞吉は、飯盛山上の懐しき仲間——白虎隊士が眠る墓地の近くに葬られており、線香の煙りが絶えることがな

い。

が、医師にして、俳人の、金井朝忠氏は、仲間と離れて眠る貞吉のために、次の一句を献じている。

自刃蘇生は恥かや  
常蔭に墓も孤り

籠城一ヶ月、激戦の果てに落城した、会津藩士は、明治の世のはぐれ鳥であった。しかし、城主松平肥後守容保に近待していた少年・井深梶之助は後年、ヘボンの後をついで、明治学院総理となり、山川健次郎は、東京・京都・九州の各帝国大学総長を歴任、出羽重遠は、海軍大将。柴五郎は陸軍大將。外交官赤羽四郎。政治家柴四郎などは、柴五郎の兄であり、ベストセラー政治小説『佳人之奇遇』を書いている。はぐれ鳥となった彼等だが、美事に新しい時代に蘇生しているのである。はぐれ鳥達は、激風に果敢に立ち向かったのだ。

# ごえん玉



## 山本千明

(ECC英会話講師)

はるかアフリカの国ボツワナからやつて来た客人、グッドウィルさんは当惑していた。香川の観光スポット「与島」の土産物店の中である。遅い、褐色の手の平の上に硬貨が数枚。その中から五百二十五円を支払うべく、慎重な面持ちでコインを一つずつレジのトレイに並べていく。五百円玉、一個。十円玉が二個。そこで彼の手は止まっていた。しばし迷ったあげく、顔を上げて「五円はどれだ？」と質問してきた。覗き込むと手の上のコインの山から三個の五円玉が「ここよ」と言わんばかりに顔を出している。「ここにたくさんありますよ！」何で

見つけられないの、と笑ってその一枚を彼の前に差し出しながら、思わず「あっ！」と声をもらした。

なぜこの時、彼は五円玉だけを識別できなかったのか。この答をすぐに思い浮かべられる方は、日頃から物事を詳細に見られるタイプかコイン製造関係者ではないだろうか。

それくらい私は意識して見直して見るまで、全く気が付いていなかった。現在、日本における通貨に「アラビア数字」が使われていること。唯一、五円玉だけが「五円」と「漢数字」のみで表記されていることに。日本語が分からない彼にとって、その「五」は数

字として認識できなかったのだ。

私にとつてはどちらも普通に読める「数字」。ゆえに、その違いにすら気が付かず、「どうして分からないの？」と大きな声で笑ってしまった。失礼千万、無礼この上なし。

日頃から「どんな時も、相手の立場に立って考えないとね」と偉そうな口をたたいておきながら、「自分の中の常識」のみで判断し行動した私。「誰かが困っている時には、自分の価値観で決めつけず、笑う前に理由を確認しよう！」とその時、改めて心に誓った。ただ、この「思い込み」というやつは、なかなか手強い。

三十年来の友人、吉田君はホームパーティーの案内チラシを読みながら、腕組みをしていた。我が家で「私の気が向いたら」開かれる、国籍年齢性別不問のカジュアルな会で、毎回、友人知人が二〜三十人参加してくれる。最近、他県から香川の本社に戻って来たばかりの吉田君をご招待するのはこの時が初めてである。

「その日は特に予定は無いけど……」と返事を浴る彼を前に「じゃあ、出席に○ね！いろいろな人が来て楽しいよ。この前はねー」と説明し始めると、即座に「オレ、人見知りなんやで」という言葉が飛んで来た。思わず「ご冗談を！」とケラケラと高笑いする私を制止すべく、眉間にシワを寄せながら彼は自己分析と不安要素を解説し始めた。「知らない他人が多く集う場にこんな人見知りでシャイな自分が突然入ってもその場に溶け込める気がしない。そんな孤独な状況で長時間居ることはしんどいに違いない」そんな説明の後に「お前さんみたいに誰とでも気軽に話せる勝者にオレの気持ちは分かんやろうけど」という比較論つき前提までいただいでしまった。

あららあー。まさかのまさか。三十年前に、同じ英会話グループの友人だった彼のニックネームは「ルパン三世」。風貌が似ていたのと、誰にでも「ふう〜じこちゃん」と声を掛けそうなフレンドリーさからつけられた

ように思う。だいたい当時大学生だった彼が所属していたのは「落研」(落語研究会)だったし、社会人になってからも営業畑で飛び回り関東の支店の「長」を勤めて本社に帰り咲いた輩(やから)なのだ。

その方が「人見知り」とは……本当に意外なところに「五円玉」は潜んでいた。それでも「前半参加してみやっぱり駄目と感じたら途中退出あり」というややこしい条件つきで出席していただけることになった。

当日フタを開けてみれば、そこには誰よりも楽しそうに談笑する彼の姿があった。帰り際には「いやあ、来てよかったわあ」と上機嫌で車に乗り込み、「また誘ってやあ」と手を振りながら笑顔で去って行った。

もし、彼の「五円玉」に気がつかず、声もかけずに「社交的」と信じて他のメンバーに紹介もせず、「ほつたらかし状態」にしていたら……。二度と来てくれなかつたかもしれない。しかし元々、話題は豊富な人なので「キッカ

ケ」さえあればムードメーカーとなってくれる貴重な存在なのだ。意外な「盲点」に事前に気がついてしつかり紹介できて「ヨカッタ」。

ただ一つだけ言わせていただきたい。私は幼少の頃より「超」がつく「人見知り」で、家の電話が鳴つただけで受話器を取るのが恐くて走って逃げるような子だったのだ。転勤族の家庭に育つたので、このままでは生きていけないと、徐々に友達を作る術を身につけて今に至る。だから「人見知り」な人の気持ちも充分すぎる程分かる(つもり)。

「お前さんのような勝者には」のくだりは、明らかに、私私生まれつき人見知りとは対極の性格という定義付けだ。

まあ、今の私から昔の私を想像するのは確かに難しいかも。今度その辺のところじっくり聞いてもらわねば。「申告」しなければ、なかなか気がついてもらえないのが「五円玉」なのだから。

# 地産地消を思う



## 宮本 富夫

(高松大学 教授)

ヴェルツブルグで開かれたミーティングに参加した折、フランケンワインの醸造所を訪ねる機会を得た。主催者の心くばりに感謝しつつ見学する。その醸造所は古くその地を治めていた王様のアイデアによって始められたという。「どういった産業に取り組むと、将来にわたって地域の人々に貢献することができるか、この地域の気候と土壌に合った栽培植物にどのようなものがあるかと、先ず考えた」と、ワイン造りを始めるに至ったいきさつを、当主がいさつの中で述べられた。ブドウを栽培すること、ワインを造ることを最終的に選ばれたという。

伝統の製法にしたがってワインを造っているということであったが、予想に反し、醸造所にはステンレス製と思われる大きな容器が並んでいた。聞けば、ステンレス製の容器だと木製のそれに比べ、ワインの渋みが少なくなるからということであった。ステンレス製の容器を使用することはやむをえない選択であったと説明にあった。醸造所内や容器に住み着いている酵母菌がどの程度関わっているのだろうか。ワインの世界に疎い私には理解の範囲を超えるものと思えた。

具合と結びつけたワインの味についての説明・講釈を聞きながら、何種類かのワインを試飲する機会が持たれた。ワインの味に対する好みはさておき、味の違いを実感することができた。ラボの仲間はずっとりと楽しんでた。ワインは収穫されたブドウの品質に大きく左右され、ブドウの品質は、気候の影響を大きく受けるという。土壌管理はある程度人の手による部分があるが、気候はままならない、受け入れるのみ。結果として栽培植物といえども収穫物は天の恵みということになるのだろう。いいブドウが収穫できる年もあり、そうでない年もある。露地栽培ゆえの楽しみであり苦勞であろう。日本だと品質の均一性を保証するためのハウス栽培という展開もあるのだろうが、ドイツの農に携わる人たちはこの点は頑固であり、おおらかであるように見えた。露地栽培にこだわりをもっているようだった。

秋になると、町のスーパーにラベルのないボトルに入った、気泡がブク

ブクと発生しているワインらしきものが並ぶ。コルクの栓ではなく、針の孔が一つあいたラップで蓋をされている。孔は気泡を抜くための備えらしい。ラボの仲間はヤングワインだと説明してくれた。この時期しか飲めないから是非味わうようにとのコメントを添えて。求め、試飲すると泡だったブドウジュースに近かった。見方を変えると薄いシャンパンのようでもあった。アルコール度が低く、辛党でない身にも十分楽しむことができる。ヤングワインの時期を過ぎると、マインツ近在の村ではワインフェストが催された。ブドウのツルらしきもので飾りつけたトラクターを先頭に民族衣装をつけた村人が加わった行列が行われ、祭りの参加者にワインが振る舞われた。日本の秋祭りのドイツ版、収穫を祝うお祭りだった。主催者も参加者も、もっぱらワインを味わうことを楽しんでいった。

村には村それぞれのワインがあったように思う。地産地消のワイン版ということになるのか。ビールについても

同じような事情にあったように思う。その地でとれるものをもとに食べ物、飲み物を造り、楽しむ。もちろん、村を訪ねる人にも振る舞う。量的には限られるが、販売もする。ワイン、ビールを求め、小さな村や町を訪ねると、自分の味覚に合うものを見つける幸運に恵まれるかもしれない。辛党の方にはおすすりかと思つた。なにしろ、ビールは水より安い。ビール党は、当然のごとく水よりビールを選ぶ。

「地産地消」とは、「地元で生産されたものを地元で消費する」という意味で言われる。我が家では、かつて裏作に麦を栽培していた。品種は裸麦と小麦。小麦は地元の農協へ持ち込み製粉してもらっていた。その粉をもとにうどんを造ってもらってもいた。親に頼まれうどんを造ってもらいに農協へ出かけ、うどん作りの過程を見ながら出来上がるのを待つ。当時、粉に水を混ぜ、練って伸ばし、機械を使い、切っていた。職員の方の手際のいい作業を見るのは子どもの目に楽しみだった。

家に持ち帰り、ゆでていただく。現在のさぬきうどんにいわれるコシは、ほとんどなかった。色が少し黒めで、風味豊かであったと記憶する。地産地消のうどん版であった。

ところで、さぬきうどんの原料にはASWと呼ばれるオーストラリア産の小麦が多く使われているという。この事実を知らされた時には、「えっ」と思わざるを得なかった。ASWはグルテンが多く含まれ、コシの強さをだしやすいとされる。さぬき産の小麦を使用しないさぬきうどんに対し、味の良し悪しはさておき、なにがしかの違和感を覚えるのは、たぶん私だけではないように思う。さぬきの夢二〇〇〇、二〇〇九と地元で育てやすい小麦が開発され、その地粉を用い、さぬきうどんを地産地消のうどん版に近づける努力が続けられていることは喜ばしい。ドイツのワイン造りのような状況に近い将来形成されることをと望み期待したいが、難しいことなのだろうか。

## 小説風・江戸神仏歳時記 (25)

浅草・<sup>おとりさ</sup>鷺<sup>ま</sup>神社

## 郡 順 史

平成の二十四年七月三十日、今回は浅草にあるおかめの面をつけた熊手で有名な「鷺神社」を訪らせていただくことにした。

しかし地図をみると浅草とあるが、地番からは千束町、要するにあの旧吉原の遊里町の更に奥で、電車の便もなく、浅草から十五分ほどかけて歩くより法はないという。

筆者は足が少々弱いので歩くのは苦手、そこでタクシーに乗った。乗った途端「あつ」と思った。今日は七月三十日、明治天皇がお亡くなりになって百年、明治神宮で東京中の主だった神官、宮司さんたちがあつまって厳かに祭儀がおこなわれており、鷺神社の宮司さんもおいでになつていらつしやるだろう、従つてお留守かもしれない。だがここまで来て引きかえせない。神官さんならどなたでもよい、と図々しくきめこんでそのまま。

ものの十分とかからず神社の前に着く。車を降りたとたん、目まいを覚えそうになった。カッとした日照りである。

そういえば家を出る時テレビが「今日も三十度を越しましょう。どうぞ熱中症にはくれぐれもご用心下さい」と言っていたのを思い出した。

走るようにして境内に入る。

まずは何より先にお手水を使わして戴き、社前へ。実に清潔きれいだ。二禮二拍手一禮をして退り、社務所へ。だがやはり誰もおらず、御用の方は御礼所へとの貼り紙がしてある。そこで若い神宮さんに逢い、来訪の意を伝える。するとその宮本智晴さんとおっしゃる若い神官さんは明瞭且つ爽やかな言葉遣いで応答して下さった。

やはり宮司さんも権宮司さんもおられなかったが、宮本さんの応答とパンフレット、それから筆者の前もつての調べでほとんどの用は足りたので、篤く禮を述べて神社を一廻りしてから境内の外へ出た。

外へ出てあきれた。

余りの暑さでノドが渴いたので喫茶店でも入って休もうと思つて探したが一軒も無い。通行の近所の人に訊いたら、「この辺にはありません。浅草まで行かねば」という返事であつた。驚くべき事に、さればソバ屋さんでも軽食堂でも、と思つたが、それすら見あたらないではないか。

びっくり仰天したが、困るのは喫茶店や食堂に入つていつものように近辺の人から驚神社さんの、殊して熊手ならびにそのご利益の評判、自慢話などを聴かないと記事にならないので、仕方なく浅草方面に向かつて炎天下をとろとろと歩き出

した。

だが、これも驚さんの御利益の一つなのか、いくら歩かないうちに小さな喫茶茶事所を発見し、いそいそと入つて行つた。(ここでの噂話、評判などは後に記する)。

しかし奇怪な話である。これも後に記す予定であるが、驚神社といえ、神社そのものは大社とはいえず、江戸時代初期はそう有名でなく流行もしなかつたが、中期八代將軍吉宗公の頃からぼつりぼつりと流行りだし、十一代家齊公の文化文政(一八〇四―一八一九)になると爆発的な流行をみせ、十一月の酉の日のまる祭りには黒山のような人出で賑わつたという。その主たる原因は、熊手にある、と言われているが、江戸ッ子はそんな簡単なものではない。熊手を掲げたり担いだりするのも恰好よいと思うかもしれないが、やはり何と言つてもご利益である。ご利益という現実的なトクがなければ駆けつけて来たり、黒山の行列を作りはしない。では熊手にどんなご利益があつたのか。これも逸話、評判を加えて後述する。

ここで一つだけ変な話を加える。むろん現実の話で、筆者にとつて少々迷惑な話ではあるが。タクシーを浅草橋の駅で降りようと思つて、ふと気づくと足許に小銭入れが落ちていたのであ

る。ここからタクシーの運転手さんとの押し問答。

運転手さんに告げると、「中にいくら入っていますか」と訊くので調べると千円札が三枚とあとは小銭。

その旨を答えると、運転手さん、「お客さんが拾ったのですから、客さんが交番へ届けるか、どうにかして下さい」という返事。どうにかというのは、着服、つまりネコババしろと言うことだろう。

一瞬、これも鷺さまのご利益かな、と思ったが、神さまがそんな不正をするはずはない、と思い直して、「車の中で拾ったのだから運転手さんが交番へ届けてよ」と言つて、財布をもとの位置に落し直してタクシー代を払つて降りてしまった。

それでいいのだ、と今も思っているが、だが、あの運転手さん、果して交番か自分の会社に届けたかしら、ネコババなんかしないだろうな、と帰りの電車の中でしばらく思い続け、自分自身に苦笑したのだった。

## 二

さてではこの辺でこの神社に祀られている神様のお名と出自をおおしえしよう。

神様は二神いらつしやつて、お一人は、天日鷲

命（あめのひわしのみこと）と申しあげ、もう一神は日本武尊（やまとたけるのみこと）である。

なぜこの地に祀られるようになったか、伝記伝説によつて記してみよう。

いつの頃かわからない。とにかく神様自身に語つていただく。

その大昔の春の一日、西の方から大鷲が飛んで来た。そして村の上空を二、三回転すると、大きな榎の樹のてっぺんに降り、鷲の背中から一人の人形ふうの人物がおりて来た。そして通りかかった百姓ふうの男に、

「この村長（むらおさ）は惣左衛門と申したな」と問いかけ、男がびっくりして「はい」と首肯くと、「すぐ呼んで来なさい」と命じた。

聴いた村長の惣左衛門は小首をかしげながら、それでも急いで駆けつけ、鷲の人物を二眼見てびっくりした。人間と変らない姿軀顔立ちなのだが、その立派さ、気品はただならぬものがあり、惣左衛門は思わず大地に両手をついて、「村長の惣左衛門でございます。ご用のおもむきは何でございますいませう」と声をふるわせて訊いた。

「わたしは天日鷲命と申す。知つておるか」

「いいえ。私は無学者ですのう」

「左様か。わたしは元は高天が原で音曲をつか

さどつておつたが、先の日、天照大御神さまが天の岩戸におかくれになった際、弦器をもつて岩戸のおん前で音曲を奏（かな）でておると、一羽の大鷲がとび来たつて弦の先に止まつて大声で鳴き且つはばいた。その声音が何ともいえず美しく、神々は口々に瑞声幸音だと騒ぎ誉めたたえた。その故をもつて天照大御神さまも天の岩手をお出になられた」

「それはようございました」

「わたしは先に、諸國の護り神の任を命ぜられており、この機会に天下に降り、いづれが良いかと空から見まわり、この地が気に入つたのでこの地の護り神になることにした。ついてはわたしの住む宮居を造ってもらいたい」

「ははあ、有難うございます。早速に村人どもに命じ、お宮居をお造り申しあげます」

惣左衛門はとびはねるようにして村へ戻ると、急いで村人を集め、神様がご降臨なさつたことを告げ、至急お宮居を造ることを告げたのだつた。以来天日鷲命はこの地淺草千束の村に落着き、村の守護神として村人はむろん、近在近郷や江戸中の人びとの尊崇をうけつづけつて来ているのである。

さて、もうひと方の「日本武尊」さまの由来で

あるが、この神様は、鷲神様に遅れること数年、ある夜村長の惣左衛門の夢枕に立ち、

「わしもあの地に住みたい。天日鷲命さまのお許しも得ている。急いでわしの宮居を造つて貰いたい」

と告げた。

びつくり仰天した惣左衛門は、「なぜこんな片田舎にお二人の神様がお住いをお望みなされたのだらう」と首を傾けるとまもなく、さっそくに村人を集め、日本武尊さまのお宮居造りを命じた。

惣左衛門は、むろん日本武尊の御名は存じあげていた。武神として余りにも高名であるからである。

一年後に武尊は東夷大討伐の為、出征なされた。その勇ましいお姿を見て、惣左衛門をはじめ見送りの村人はすべて小首を傾けた。と言うのは、武尊はお一人のはずなのに、うしろから見ると無数の供兵の姿がはつきり見えるからである。

「ああさすがに神様のお立ちは、普通の武将（ものふ）の方々のものとは違う。」

感嘆おくあたわず、ほとんどの見送りの村人は、その背に向かつて両掌をあわせたのだつた。

そして二年目に、日本武尊は東夷討伐を終えて

お元気なお姿で凱旋なされた。

そして出迎えた村人、惣左衛門らに向かつて背に差した熊手を抜きとると、

「これをこの神社のお守りの一つにし、同じものをたくさん作って人々に分け与えてやるとよい」

と言いながら惣左衛門に渡した。

当時戦士が背に差していた熊手は、ただの物集めの用器はなく、武器、つまり戦器なのである。ゆえに武尊は「お守りとして」とことわったのである。

その後、このお守りの熊手は数々のご利益を多くの人々に与え、よろこばれた。

このお守りの熊手をおさずけになった日が、ちょうど十一月の酉の日であったので、以来この日を「酉の祭り」として鷲神社の例祭日と定められたのである。そして更に後世に至ると「おとりさま」と庶民的な名で呼ばれるようになり、江戸はむろん全国的に有名になったのである。

### 三

しかしこう言ってしまうと、至極簡単だが『おとりさま』は始めから大繁昌し、参拝客も引きもきらず、というわけではなかったのだ。

なにしろ土地は浅草寺の裏手で、いわゆる浅草

田圃とよばれる農村地帯、人口だつて少ないし従つて人通りも参拝客も少ない。淋しい神社だつたのだ。

これを一気に回復、繁昌に向かわせたのは、寛政の頃（一七八九―一八〇一）家齊將軍の宮司（何代目か？）の人だつたという。

彼はどうすれば「鷲神社」を大繁昌と出来ないまでも、人に識られ参拝客が多く来るようになるだろうと、一生懸命考えた。そしてひとつの成案を得ると、氏子たちを集めて、自分の案をしめし、「どうだろう、意見があつたら教えてもらいたい」と相談した。

その案というのは至極簡単、要するに当社の由緒ある「熊手」を、大きい、小さいの様々な作り、その熊手にまね小判やまねき猫、おたふく、土地産の野菜などをつけ、神官総祈願をもつて、欲する参拝客に簾価でおさずけになったらどうだろう、というものであった。

「成程、これはよい思ひつきだ」

氏子頭はまっさきに賛成し、ついで質問した。

「で、それにはどんなご利益がある、と説明するのですか」と。

「ご利益は神さまのなさる事。私どもが口にするものではありません」

「その通りです。ご利益は私も氏子が、色々と考えて参拝の人、熊手を求めた人に説明してあげればよいのです。」

副氏子頭が膝をすすめて主張した。

かくて鷲神社では大小様々の熊手がおさずけされるようになった。

だが、だからといってたちまち熊手が名物になった、と言う訳ではない。氏子たちの懸命のご利益吹聴にもかかわらずそうは簡単に乘ってくるものではない。たくさん作った熊手がたくさん残る年もあった。神官さんたちはそれを祭りが終わると、それこそ泣く思いで火に焼いたという。

以上は、神社の裏手でもと商売屋をやっていた木村さんという七十二歳のおじさんが、祖父、父親からきいた伝説、言い伝えて「嘘か本当か知らないよ。ただずいぶん聞かされた話を、そのままお前さんに話したのだよ」

とことわた上でのお話である。

ただこうしたお話は、どこの神社さんにもあるものだが、それをこうして記憶していて語ってくるのが何より嬉しいし、また歴史的にも大切な事ではないかと思う。

更に神社の歴史的記録によると、この熊手逸話は、その後時代が下がってゆくに従い、江戸

市民の話題をさらい、文化文政（一八〇四～一八二九）更に天保（一八三〇～一八四三）つまり幕末近くなるに従って、それこそ爆発的人気をよび、十一月の酉の市、あるいは「おとりさま」の祭日には、江戸中の人間が集って来たのではないかと思える参詣人が黒山のように、それぞれに熊手をかついだり手に下げたりして、吉原通りはむろん浅草の観音さまの雷門通りまで埋め尽くし、中には、「かっこめ」「はっこめ」と叫んで大熊手を振りまわす者もいたという。この掛声は、熊手で開運、繁昌を「かっこめ」「はっこめ」要するに掻き集めよう、という縁起言葉である。

「本当にそんなかっこむほどのご利益があったのですか」

さきの木村さんにその点を訊くと、「あつたにきまつているじゃねえか。ご利益というのは、あると思うから信ずるので、信じねえものには有るわけがねえんだ」

江戸ツ子言葉で叱られてしまった。

しかしこの言葉の中にも一理あると思う。かの戦國武将の毛利元就は、「信なきものは信おくあたわず」と言っている。つまり心に信用、信仰、要するに自分以外のものを信ずる心を持たぬ者は、信用して大事を任せることは出来ぬ、という

事である。「信」は何事においても大事ななのである。

最後に、江戸、明治のすぐれた俳人の句を紹介して筆を措く。

春を待つ　ことのはじめや　酉の市

宝井其角

人並みに押されてくるや酉の市

高浜虚子

一葉忌ある年酉にあたりけり

久保田万太郎

その他大勢の作家文化人が、「酉の市」の感動を記している。ぜひお読み下さい。

— おわり —



(表紙説明)

■丸亀うちわ

瀬戸内国際芸術祭二〇一〇作品  
西堀隆史「うちわの骨の家」(男木島)で使われたうちわの骨たちは、うちわの港ミュージアムに移設され「うちわの骨の回廊」となっている。

うちわの港ミュージアム

所在地／香川県丸亀市港町三〇七―十五

TEL／〇八七七―二四―七〇五五

FAX／〇八七七―四三―六九六六

有限会社 長戸団扇 長戸幸夫

所在地／香川県丸亀市瓦町八十四番地

TEL／〇八七七―二二―六四八四

FAX／〇八七七―二二―八二九〇

「酒林」随筆特集 第八十四号

平成二十四年十一月一日発行

発行人 西野信也

印刷人 株式会社 太陽社

発行人 西野金陵株式会社

高松市魚井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

# 西野金陵株式会社



## ■酒類部各事業所

- 【本 店】  
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133  
【高松本社】  
〒760-8544 香川県高松市亀井町2-8 ☎087-835-4133  
【高松支店】  
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40 ☎087-851-4133  
【観音寺支店】  
〒769-1613 香川県観音寺市大野原町花稻1071-1 ☎0875-56-3133  
【丸亀支店】  
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70 ☎0877-23-4133  
【徳島支店】  
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4 ☎088-653-4133  
【松山支店】  
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1 ☎089-975-4133  
【岡山支店】  
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209 ☎086-296-2136  
【洲本支店】  
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28 ☎0799-22-0788  
【大阪営業所】  
〒565-0824 大阪府吹田市山田西2-1-14 ☎06-6877-2671  
【東京営業所】  
〒134-0083 東京都江戸川区中葛西4-6-12 ☎03-3686-4133  
【多度津工場】  
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880 ☎0877-33-4133  
【琴平工場】  
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133  
【金陵の郷】  
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133

## ■化学品事業部各事業所

- 【大阪本社】  
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2444  
【大阪支店】  
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2441  
【東京支店】  
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4  
西野金陵ビル9F ☎03-3552-3441  
【名古屋支店】  
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13  
ちとせビル5F ☎052-561-5531  
【北陸営業所】  
〒918-8231 福井県福井市問屋町3-815 和中心ビル1F ☎0776-24-0967  
【上海西野貿易有限公司】  
中国上海浦東外高橋保稅区基隆路6号 ☎021-6278-9549  
【NISHINO KINRYO (THAILAND) CO., LTD.】  
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng  
Klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110 ☎021-661-7014~7015



西野金陵株式会社  
四国・琴平